

大学における中国語教育のあり方について

Instruct of Chinese Language in University

周 如軍

ZHOU, RUJUN

Abstract

When Japanese students learn Chinese for the first time at the university, a teacher should bring up Chinese foundation to them firmly. Then, as for a teacher, it is important at the same time to tell happiness of the thing to learn Chinese to the students.

Of course, not only there are many points which are common between Japan and China in the culture and the social aspect but also there is a different point, too.

A teacher must make students have interest in Chinese by making them understand a difference in the culture and society between Japan and China.

I consider that the matter that students have strong interest in China is connected with raising the will that they learn Chinese.

1. はじめに

グローバル化が急速に進展している現代において外国語を学ぶことは、異文化間の相互理解を深め、国際交流を促進する上で非常に重要な意味をもっていることは言うまでもないことかもしれない。そして、大学において外国語を学ぶことは、以上のことに加えて大学を卒業した後に就職した会社などにおいて必要とされるとともに、学問・研究を進めていく上で必要不可欠なことが多いと思われる。

それでは、以上のことを外国語を教育する側から見た場合、どのようなことが求められるのだろうか。筆者が現在まで金沢大学で非常勤講師として7年間授業を担当してきた中国語を例に考えてみたい。

なお、筆者は、かつて中国の大学(南京大学)において外国語である日本語を専門として学んだ後、日本語を教える仕事をし⁽¹⁾、さらに、日本で日中通訳をし、金沢大学において中国語を教えてきた。

よって、本稿は、筆者の体験と実践を紹介することによって、大学における外国語教育はいかにあるべきかを考えるための参考となることを期待して執筆した。

2. 中国における外国語教育の体験

2-1. 大学で受けた外国語(日本語)教育

筆者が南京大学で受けた専門科目には、「精読」(読解)・「聴力」(ヒヤリング)・「日語会話」(日本語会話)・「写作」(作文)・「日本概況」・「日本文学」・「日中翻訳」などがあつた。そのうち、「精読」の授業が最も重要な科目で、ほぼ毎日あり、そのほかの科目は週1コマずつだつた。以下に、1年次から4年次までの各年次ごとに簡単に述べていきたい。

一年次には、「精読」の授業は、2人の中国人教員がチームを組んで担当していた。一人はおもに文法事項などをできるだけ詳しく説明し、テキストの読解に重点を置いていた。最初は日本の社会・文化に関する文章を読み、その後で日本の小説などを読んだ。当時はコピー代が高かつたため、クラス・メートの全員が分担して、ガリ版印刷でテキストを作成していた。もう一人は、補助的な役割を果たし、文法事項の説明はほとんど行わず、教員自身の日本滞在の経験に基づいて、日本人の日常生活における言葉の使い方について様々な実例を挙げながら説明して言葉の応用に力を入れた。授業で使用された言語は母国語(中国語)が中心で、日本語の基礎が全くなかつた1年次生にとっては理解しやすく、また、教員の日本滞在の経験⁽²⁾を聞くことによって日本に対して強い関心を持つようになった⁽³⁾。

通常、クラス(クラスメートは21人)を4人くらいの小グループに分け、学習の成果を互いにチェックしていた。

「日語会話」の授業は、日本人教員(高校の英語担当教員)が担当し、使用言語は日本語だつた。おもに日常生活に関して会話の練習を行った。まず、教員が中国における生活で生じた様々な出来事や感じたことなどについて話し、その後で受講生に対して様々な質問を行い、受講生がその質問に素早く答えられるように訓練を行っていた。「聴力」の授業は、中国人教員が担当し、香港で出版されたテキストを使用していた。短い日本語の文章をテープレコーダーで流し、その文章の内容に基づいて、4つの選択肢から正確なものを選ぶ練習だつた。

二年次には、「精読」の授業は、日本人の教員(中学校の国語担当教員)が担当した。テキストに関しては、言葉の意味と使い方の説明に重点を置いた。日本語の文章を作る宿題が多かつた。「聴力」の授業は、中国人の教員が担当した。日本語の文章をテープレコーダーで流し、一文ずつ聞き取る練習を行った。作文の授業は、中国人の教員が担当した。文章を作成する手順や注意事項を説明し、テーマを決め、それに関する文章を作成することが宿題として課せられた。「日語会話」の授業は日本人の教員(高校の国語教員)が担当した。

三年次には、「精読」の授業は、日本人の教員(高校の国語教員)が担当した。日本の高校で使用していた国語のテキストを使って、その教科書の読解に重点を置いた。また、作文の授業も、日本人の教員(高校の国語教員)が担当した。週1回作文の宿題が出され(テーマは自由)、間違つた文章について、詳しく説明を行つてくれた。さらに、「日語会話」の授業も、日本人の教員が担当した。日本語の敬語について詳しく説明して、練習を行った。「日本文学」の授業は、中国人の教員が担当した。日本文学に関する概説的なテキストを使用していた。

最後に、四年次には、「精読」の授業は、日本人の教員(大学の教員)が担当した。日本の小説の読解を行った。「日中翻訳」の授業は、中国人の教員が担当し、日本語の文章の正確な読解を行ったうえで、適切な中国語に訳す練習を行った。

このように、二年次以降は、日本の中学校や高校あるいは大学からの招聘教員(任期は1~2年)も多くの授業を担当し、授業で使用されていた言語はすべて日本語だった。高校からの招聘教員は、授業では日本の高校で使用されていた国語の教科書をそのまま使用し、受講生の日本語に関する高度な読解力の養成に力を注いだ。一方、大学からの招聘教員は、日本の有名な小説家の小説を取り上げ、小説の読解が授業の主な内容だった。

なお、講義の時間以外に、週1回程度日本の映画を鑑賞する機会があり、字幕なしの日本映画を一言ずつ理解していくのも楽しかった。

2-2. 応用力・実践力をつけるために

外国語の応用力・実践力をつけるためには、その言語を母国語としている外国へ留学するのが最もよいが、筆者が大学生だった1980年代後半頃は、中国ではそれほど簡単に日本へ留学することができなかった。逆に、南京大学には大学院生も含め、非常に多くの日本人の学生が留学していて、中国や中国語に対する関心も強かった。そのため、相互に交流する機会も多かった。南京大学に留学してきていた日本人の学生との交流は生きた日本語を学ぶ上で非常に有益だった。

現在、金沢大学にも非常に多くの中国人留学生が来ている。また、日本人の学生の中で中国語を履修している学生は非常に多いと聞いている。これは、中国語を習得する上で大いに利用すべきであり、優位な点ではないだろうか。このような中国人留学生と中国語を学んでいる日本人の学生が積極的に交流することができるような場を設定し、中国人は日本語を、また、日本人は中国語を学ぶことができるようになれば、相互にとって有益なのではないだろうかと思う。

2-3. ホテル従業員に対する外国語(日本語)教育

中国のホテルにおいて中国人従業員に対して外国語である日本語を教える仕事は、わずかに1年間という短い期間のことだったが、筆者にとって外国語を教えるという点では初めてのことであり、貴重な体験だった。

ホテルの従業員に対して日本語を教える目的・目標は、限定的かつ明確であることが特徴である。すなわち、各々の従業員が各々の持ち場で日本人の利用客に日本語で対応することができるようにすることが教育の目的である。日本人客と最も接する機会が多いのはフロントであり、ついでショッピング・センター、レストラン、ラウンジ、ハウス・キーピング、ベル・ボーイ、電話交換手などである。

授業の内容は、日本語の文法や原理・原則よりも、実用的かつ実践的で、かなり限定された内容の会話を中心である。そのため、従業員にそれぞれの必要な業務用語を中心に教育することになるが、まず、日本語の発音から指導を行い、次に単語の意味を説明し、文全体の意味を把握させるという順番で授業を進め、発音を重視し、文法事項についてはできるだけ簡単に説明した。そし

て、もっと勉強したいという意欲のある従業員のために、日本語科の大学生向けのテキストを使用して週一回「日本語学習会」を開いて教えた。ただし、従業員が日本語を学習しようとするモチベーションを維持しているのは、日本語の習得度とボーナスが連結していた点である。

いわゆる業務用の日本語は、その内容がかなり限定されたもので十分であり、日本語の文法をしっかりと学習するよりも、各々の持ち場で必要とされるマニュアル的な会話を理解するだけで一応事足りるということができる。この点が大学で求められている外国語の学習とは大きく異なっている。

3. 日本における日中通訳の経験

3-1. 通訳養成専門学校

1992年2月から1993年3月までの1年余り、通訳養成専門学校のサイマル・アカデミー東京校中国語通訳研修クラスで日中通訳の訓練を受けた。能力別クラス編成が行われ、上位のクラスは同時通訳の即戦力として使えるような高い水準が求められていた。おもに外国語の基礎を学ぶ大学における外国語教育とは明らかに異なっていた。

3-2. 日中通訳

1994年から1995年までの約1年間、KDDテレサーブ(KDDの子会社)で日中間の国際電話通訳を行った。その内容は、日常会話や常套句・あいさつ言葉の程度を越え、非常に多岐にわたり、かつ複雑だった。それをこなすために、常に広い知識を蓄積し続ける必要性を感じた。外国語を理解するためには、その国の文化や社会をも理解する必要があるという点は、大学における外国語教育にも通じているように思われる。

4. 金沢大学における中国語教育の実践

金沢大学における中国語の授業では、2006年度から日本人教員と中国人教員の連携授業が始まり、共通のテキストを使用して、日本人教員が文法事項を説明し、中国人教員が会話の練習をすることになったので、以下に記載される内容はおもに2005年度までに筆者が担当した授業のことになる。

4-1. 中国語A

中国語Aは初めて中国語を学習する学生を対象としており、受講生のほとんど大部分が一年生である。ネイティブの人が聞き取れるように、発音の練習に重点を置き、そして前期と後期それぞれ3～4回の発音テストを行い、その成果を確かめていた。

また、毎週授業の最初に小テストを行い、受講生の授業に対する理解度などを把握した。テキス

トで学んだ文章について、実践的な会話の練習も行った。

さらに、もっと勉強したい受講生に対して、授業が終了した後の昼休みの時間を利用して、NHK中国語講座のテキストを使用して練習を行った。

4-2. 中国語B

中国語Bは、すでに中国語Aを履修し、中国語の基礎を身につけており、応用力を身につけることを目指している学生を対象としている。授業では、中国の日常生活に関する会話の練習を行った。毎回、10の場面を想定し、その場面に適切した言葉で対応できるように練習を行った。また、中国語のニュース放送も取り上げ、やや速いスピード(中国においては通常のスピード)の中国語を聞き取ることに慣れるようにしたり、受講生が関心を持っているテーマについて、中国語の新聞記事などを利用して練習した。

これによって、受講生は中国社会の現在の動きを知るきっかけもなった。さらに、中国語の語彙力を高めるために、新聞記事やニュースのほか、中国の映画、漫才、歌謡曲、手品なども取り上げた。

4-3. 日本人の学生の特徴

日本人の学生が中国語を学習する上で困難を感じる点はどこにあるのだろうか。日本人の学生は会話が苦手である。特にやや長い文章の会話は難しいようである。

また、日本人の学生は少し無気力で、積極性に欠けるように思われる。優秀な学生の多くは非常に控えめであるように思われる。逆に、不真面目であり優秀ではない学生が教員あるいはその授業に文句を言ったり、批判したりすることが許されていることは驚きだった。

5. おわりに

大学においては、中国語が初修言語である場合は、極めて当たり前のことだが、基礎をしっかりと教えるべきであると思う。

中国語を学ぶことの楽しさをいかにして伝えるかが重要である。その楽しさは、文化や社会の多様性を理解することに根ざしていなければならないと思う。日本と中国の間には、文化や社会の面で共通する点もあるが、異なる面も多くある。日本と中国の社会・文化における違いと共通性を学生に理解させることを基礎において中国語に対する興味・関心を高める必要がある。

大学における外国語教育の目的を具体的かつ明確に設定し、それを教員が熟知するとともに、学生(受講生)にも周知することが必要である。民間の外国語学校との差別化を明確にする必要がある。

日本人が中国語を学ぶことの意義が日本と中国の友好関係を促進するための架け橋となることであるという意見⁽⁴⁾に同意したい。日本の諺に、「好きこそ物の上手なれ」という言葉があるが、中

国に強い関心を持つことが中国語の学習意欲を高め、その上達につながるようになると思われる。

注

(1) 筆者は、中華人民共和国南京大学外国語言文学系日本語言文学専業(外国語学部日本語言文学専攻)において、1985年9月から1989年7月までの4年間、日本語・日本文学を学習した。同大学を卒業した後、約1年間、江蘇省無錫市の日中合弁ホテル(四つ星)で中国人の従業員に対する日本語教育を担当した。

(2) 例えば、赤い羽募金の話は強く印象に残った。

(3) 筆者は、大学入学試験の時、英語の専攻に進学することを希望していた。ところが、どういう事情があったのか不明だが、日本語の専攻に配属されてしまったので、大学に入学した当初は、日本語及び日本に対してはそれほど関心・興味がなかった。

(4) 安藤彦太郎著『中国語と近代日本』岩波新書12(岩波書店、1988年)。